

新見市における人口減少とその状況

The Decline of Population in Niimi City and the Current Situation

板野 敬吾

Keigo Itano

中国短期大学情報ビジネス学科

責任著者：板野 敬吾

Email : itanok0628@gmail.com

Key words : 新見市, 人口減少, 少子化, 出生率, 社会増減

抄 録

現在, 日本では少子高齢化の問題が議論されており, それに伴う人口の減少と経済の縮小が大きな課題となっている。

本稿においては岡山県新見市を取り上げ, 同市における少子化と人口減少の現状と問題点を検討した。

新見市では人口はピーク時から大きく減少しており, 将来においても減少が続くと考えられている。ここで, 本市の少子化の原因となる結婚の現状を調査分析してみた。その結果, 結婚件数が減少傾向にあることが原因の日筒と考えられるが, さらに 25 歳から 39 歳までの年齢における男女人口のアンバランスが問題点として浮かび上がった。また, 人口流出については年齢階級別にその状況を検証し, 人口減少の原因のひとつが若年層の人口流出の後, 回復していないことであるということがわかった。

1. はじめに

現在, 日本においては少子化とそれに伴う人口の減少が問題となっている。また, 人口減少の問題は, 都市部よりも地方において著しい。さらに, 高齢化の問題が介護等社会保障費の増大や生産年齢人口の減少による経済の縮小が懸念され, 大きな社会問題となっている。

本稿の対象である岡山県新見市においても人口減少の問題はかねてから言われており, 2020 年にはピーク時の 66,146 人から大きく減少し, およそ 42.5%となる 28,079 人となった。今後もさらに減少すると予想されている。

地方における人口減少の問題は, 少子化と人口の流出の二つの側面がある。以下において, この両面から新見市の人口減少を考えてみたい。

2. 新見市における人口推移

新見市における人口減少に関し, まず新見市における総人口がどのように推移してきたのかを確認していきたい。

なお、2005年1市4町が合併し現在の新見市となったが、本データは合併前の4町を含めたデータである。^[1]次に示す「図1. 新見市における総人口推移」は1920年以降の総人口の推移の状況である。本市の人口は、1955年をピークに下降線をたどっている。2007年の合併時36千人を数えていた人口は2025年には24,686人に減少する見込みで、今後将来に向けて悲観的な状況にある。

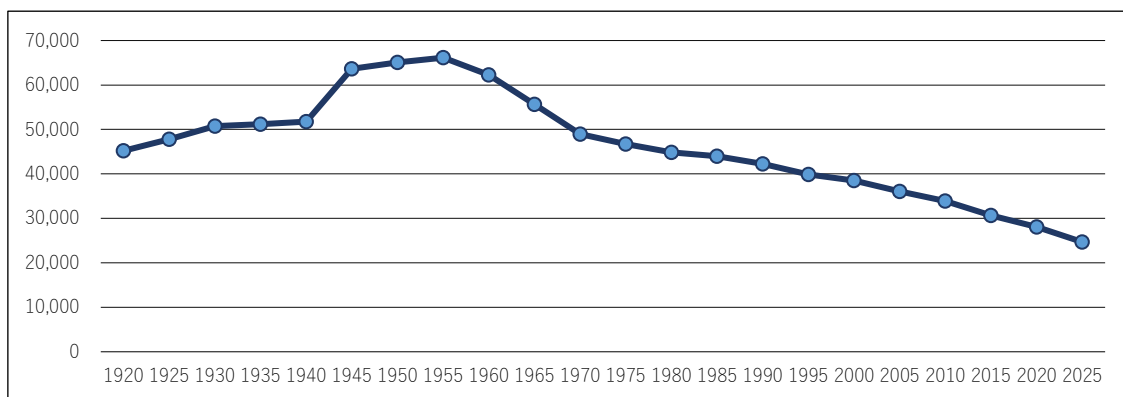


図1. 新見市における総人口推移
(出所：国勢調査)

新見市の総人口の傾向を把握したことから、次に本市における人口を男女別に国勢調査年度毎に比較し、その状況を確認していきたい。

「図2. 新見市における男女別人口推移」は2005年以降の男女別人口を示したものである。これによると、本図の対象である2005年以降ではすべての年で女性人口が男性人口を上回っていることがわかる。

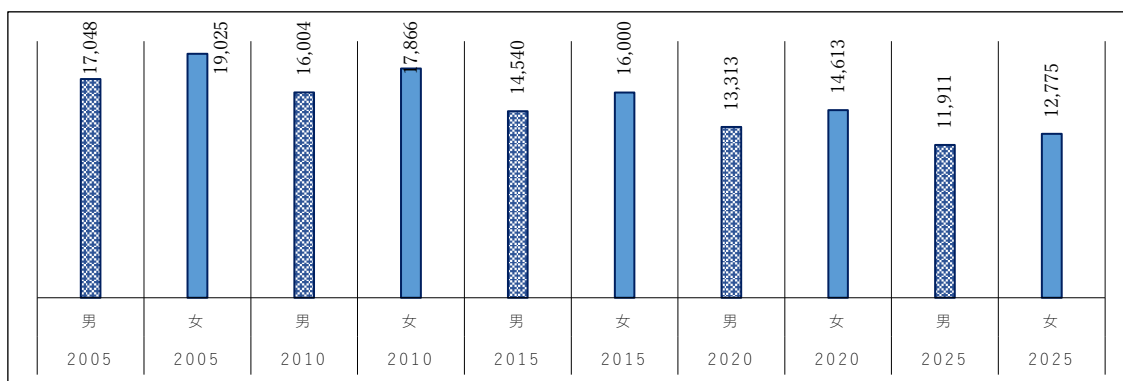


図2. 新見市における男女別人口推移
(出所：RESAS のデータを抜粋して作成)

以上が人口動態の概況であるが、人口減少についてさらに詳しく検証してみたい。

下に示すグラフは2010年及び2020年の新見市における人口メッシュを示したものである。点線で示した2010年のメッシュ数と実線で示した2020年のデータを比較すると、2020年の方が「5人以下」のメッシュ数が45増加し、一方、95人以上のメッシュは20減少していることがわかる。このようなメッシュ数の変化は集落の小規模化が進んでいることを表すものである。

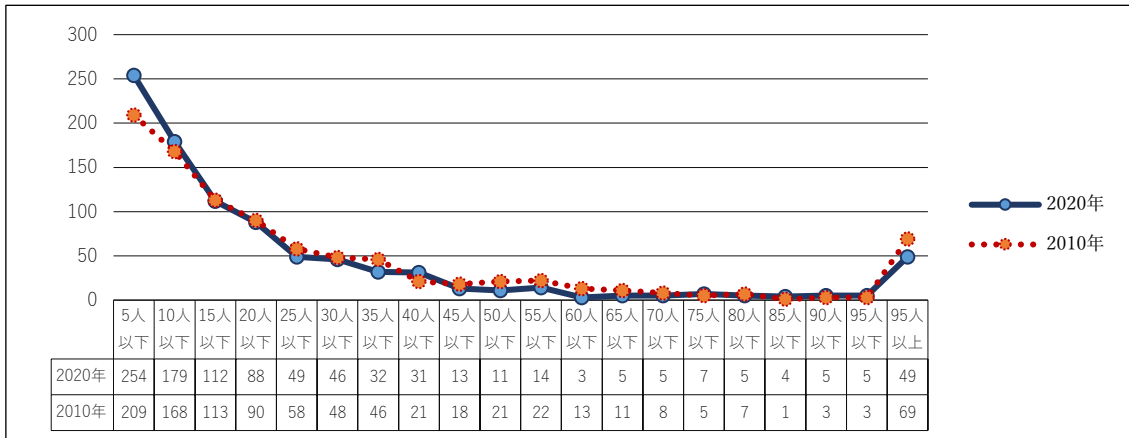


図3. 2010年及び2020年区分メッシュ度数分析図

(出所：総務省「国勢調査に関する地域メッシュ統計」)

過疎化の進む新見市において、集落によっては人口の減少がその集落の存続そのものに影響する可能性がある。すなわち、行政サービスは、人口減少による税収の減少と、過疎地でのサービスの維持のためのコストの高騰の両面で低下する可能性が高くなるのである。

一般的に、人口減少については少子化と都市部への人口流出という側面でもとらえられることが多い。

次章以降、新見市における人口減少の問題について検討を加え、新見市固有の問題の有無を検証していきたい。

3. 新見市における出生率

まず、人口減少に関し、その原因として取り上げられる出生率について探してみたい。

「図5. 合計特殊出生率比較」は新見市の合計特殊出生率の推移を示したものである。本図では新見市のデータと併せ、岡山県及び全国の合計特殊出生率のデータを参考として示した。まず、これら三つのデータを比較してみたい。

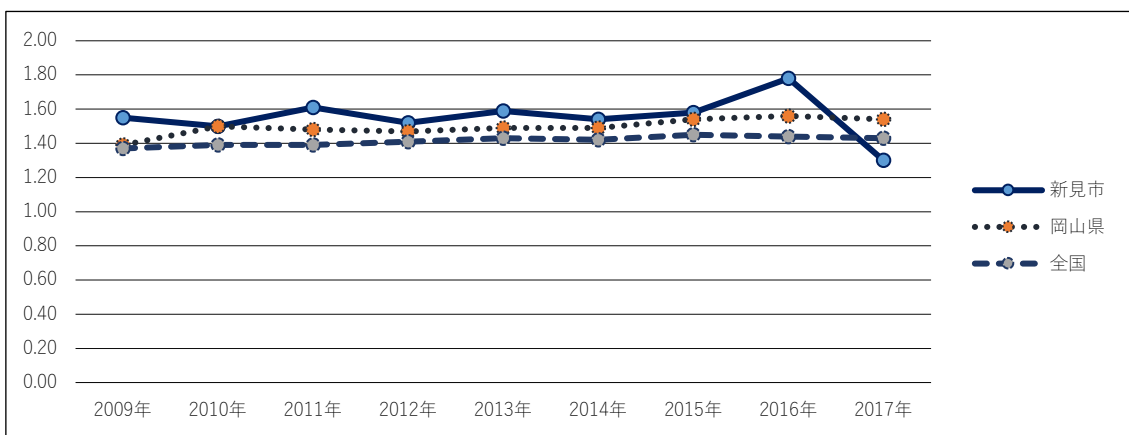


図4. 合計特殊出生率比較

(出所：新見市子ども・子育て支援事業計画に係る点検・評価資料)

本図によると、新見市における合計特殊出生率は、2015年までは概ね1.5から1.6を推移していた。また、岡山県全体及び全国のデータと比較すると、2017年を除き、新見市の合計特殊出生率が上回っていることがわかる。しかしながら、人口を維持するには合計特殊出生率が2.07以上必要とされていることから、新見市の合計特殊出生率は低い水準で推移していると言わざるを得ない。

日本では女性が一生のうちに子供を産む率が低下しているが、新見市においても、岡山県、全国の平均値より大きい合計特殊出生率ではあるとはいえ、人口減少を食い止めるまでには至っていないのである。

4. 新見市における結婚の状況

次に、出生率の低下と結婚件数を比較してみたい。

まず、新見市における結婚及び離婚件数について確認しておく。下図「図5. 結婚・離婚数推移」によると、結婚件数に関しては2015年以降低下傾向にあることが読み取れる。一方、離婚に関しては、12年以降、若干上昇傾向で推移している状況にある。

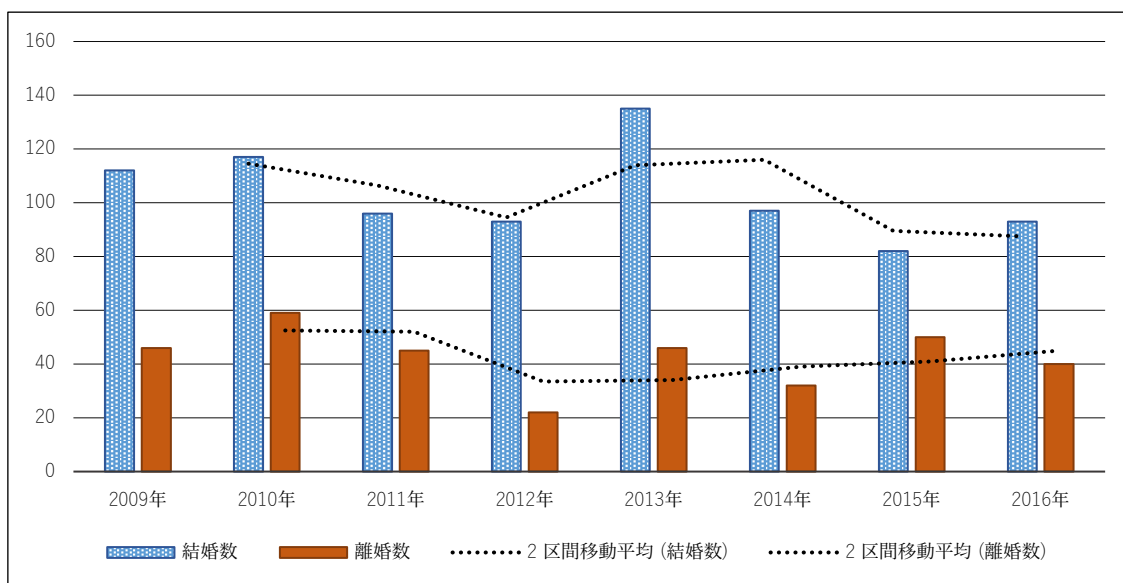


図5. 結婚・離婚数推移

(出所：新見市子ども・子育て支援事業計画に係る点検・評価 資料から抜粋)

結婚・離婚状況を確認したことから、さらに合計特殊出生率対象の女性人口と結婚・離婚件数を比較してみたい。

次表「新見市における結婚・離婚と女性人口比較」を見ると、15歳~49歳の女性の結婚件数は、2010年より2015年のほうが低下していることがわかる。また、人口比でみた結婚率は2010年よりも2015年の方が0.34ポイント低下している。従って、結婚件数が少子化に影響している可能性が考えられる。ただし、本データは国勢調査実施年におけるデータ比較であり、比較対象件数が少ないことから生ずる誤差の可能性に注意しておく必要がある。

表 1. 新見市における結婚・離婚と女性人口比較 (単位：件, 人)

年	2010 年	2015 年
結婚数	117	82
離婚数	59	50
15～49 女性人口	5,345	4,429
結婚数÷15～49 歳女性人口	2.19%	1.85%
離婚数÷15～49 歳女性人口	1.10%	1.13%

(出所：国勢調査等のデータを加工・作成)

ここで、合計特殊出生率の対象である 15 歳～49 歳の女性人口とそれに対応する男性の人口を比較検証してみたい。下表「表 2. 合計特殊出生率対象年齢の男女人口比較」は、2005 年以降の男女それぞれの人口及び男女の人口の差を年齢階級別に示したものである。

表 2. 合計特殊出生率対象年齢の男女人口比較 (単位：人)

集計年	男女区分	15～19 歳	20～24 歳	25～29 歳	30～34 歳	35～39 歳	40～44 歳	45～49 歳	15～49 歳人数計
2005	男	945	617	814	893	731	875	1142	6,017
	女	1,102	712	702	807	734	902	1,134	6,093
	男女差	-157	-95	112	86	-3	-27	8	-76
2010	男	795	542	659	809	844	715	903	5,267
	女	939	658	620	668	795	755	910	5,345
	男女差	-144	-116	39	141	49	-40	-7	-78
2015	男	708	420	587	625	736	812	682	4,570
	女	729	493	506	589	638	768	706	4,429
	男女差	-21	-73	81	36	98	44	-24	141
2020	男	701	411	453	550	617	735	830	4,297
	女	688	572	376	485	570	634	748	4,073
	男女差	13	-161	77	65	47	101	82	224

(出所：RESAS のデータを抜粋して作成)

本表によると、概ね「15～19 歳」及び「20～24 歳」の 2 つの年齢階級については 2020 年を除き、男性が少なく女性の人口が多い状態となっている。一方、25 歳から 39 歳までの各年齢階級については、2005 年の「35～39 歳」の階級を除き、女性が男性より少ないことに注目したい。(表中、太字で示した)

ここで、新見市の男女の平均初婚年齢をみたい。下の「図 6. 平均初婚年齢推移」を見ると、男女ともに初婚年齢が上昇し 2018 年では男性が 31 歳、女性は 28.7 歳となっている。

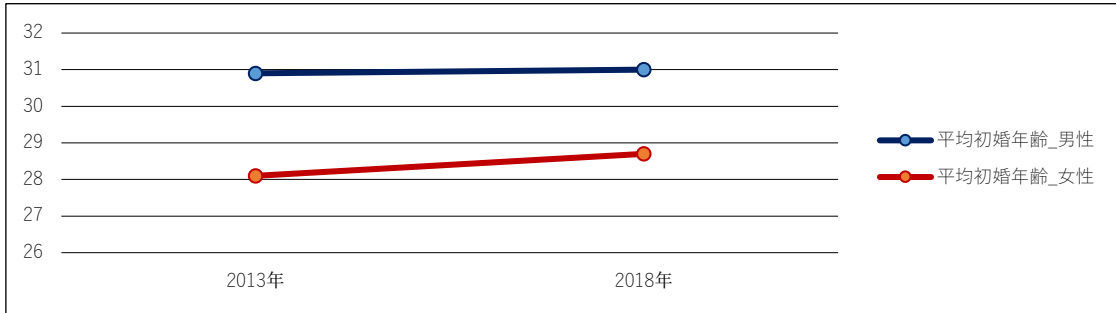


図 6. 平均初婚年齢推移
(出所：国勢調査より抜粋)

さらに、未婚率について見てみたい。以下の「図 7. 男女別未婚率推移」によると、2020 年における男性の未婚率は 58.0%であるのに対し、女性は 36.3%であった。男女で 20 ポイント以上の差があったのである。

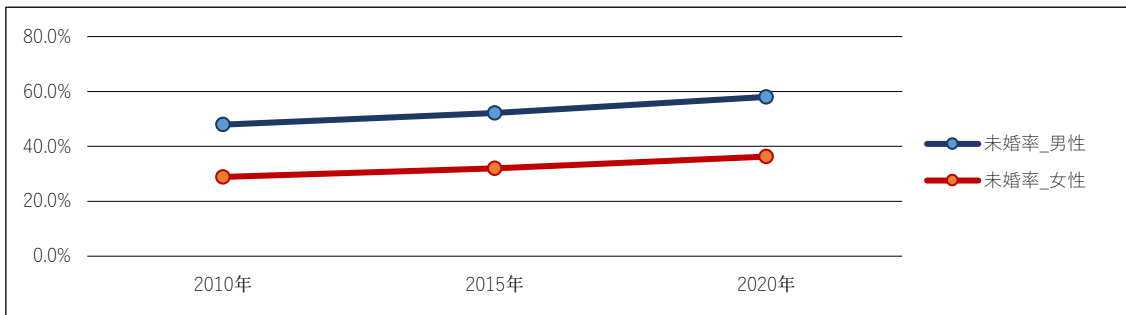


図 7. 男女別未婚率推移
(出所：国勢調査より抜粋)

以上のことをまとめ、新見市における人口減少で考えられる理由を考えてみたい。妊娠適齢期とされる 25 歳～39 歳の年齢階級で女性が少ないことは、男性側の結婚の機会が少なくなったということを意味する。女性人口が少ないことが、未婚率の上昇と相まって結婚件数が減少した一因であると考えられるのである。^[2]

5. 新見市における人口流出の状況

本章では、地方における人口減少の理由と考えられている人口流出について考察していく。まず、新見市における人口流出入の状況を調査し、同市の人口減少との関連を検証してみる。

「図 6. 年齢階級別新見市人口流出入状況」は 2000 年から 2015 年間の新見市における人口流出入の状況を示したものである。本図により、男女の「20～24 歳」の年齢階級で大きく流出していることがわかる。また、「25～29 歳」の年齢階級では、男性が流入しているのに対し、女性は流出していることが読み取れる。それ以降の年齢階級においては大きな人口流出入は見られない。

以上のことから、新見市における人口減少の大きな問題点は、15 歳から 24 歳までの年齢階級で減少した人口が戻っていないことである。いったん減少した人口が回復せず、人口が減少した状態が長期間継続している。これが第 1 章で述べた新見市における人口の減少傾向という結果となっているということなのである。

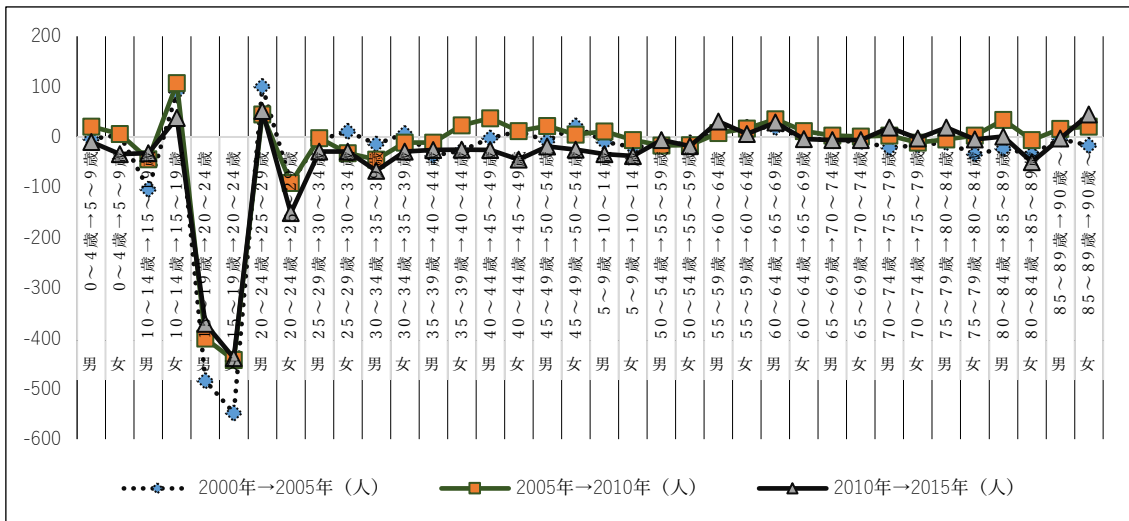


図8. 年齢階級別新見市人口流入状況
(出所：RESAS のデータを抜粋して作成)

続いて、男女の人口流入の状況をさらに詳しく検証していきたい。

次のグラフは2020年の新見市における人口流出の状況を男女別、年齢階級別に示したものである。

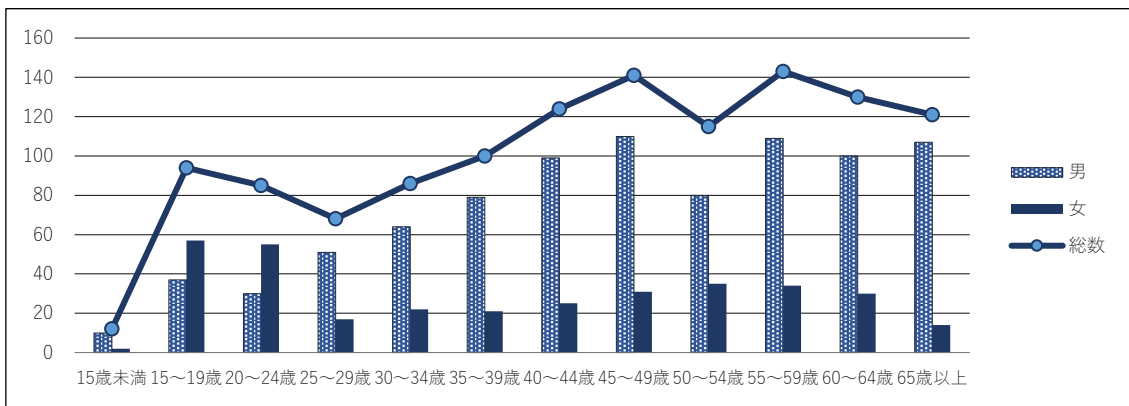


図9. 2020年年齢階級別新見市人口流出数
(出所：RESAS のデータを抜粋して作成)

上図によると、「15～19歳」の年齢階級から「20～24歳」の年齢階級では女性の転出が男性より多いことがわかる。一方、「25歳～29歳」の年齢階級以降は男性の転出が多く、「50歳～54歳」の階級でいったん流出数が低下するが、その後は再び増加している。

一方、女性に関しては、「15～19歳」から「20～24歳」の年齢階級で男性より多く流出している。その後25歳から39歳までの年齢階級でも一貫して流出しているが、男性の流出データと比較すると緩やかなカーブを描いている。

以上のことから、次のことが言えよう。すなわち、「15～19歳」の年齢階級で男女ともに大きく減少した人口が、男性は「20～24歳」の階級でいったん増加に転じるが、一方、女性はさらに減少の状態が続いている。この

男女の人口流入の差が、各年齢階級における合計特殊出生率対象の年齢階級における女性人口が少ない理由であると考えられる。

6. 新見市における昼夜間人口の状況

次に、新見市の昼間人口と夜間人口に関し、2020年における男女別の状況を以下に示す。本データは、通勤・通学により新見市から転出あるいは転入する状況を表したものである。

まず、男性の昼夜人口の状況を以下の図に示す。

表3. 2020年における男性の年齢階級別人口 (単位：人)

年齢階級	昼間人口	夜間人口	昼間・夜間の差
15歳未満	1,434	1,426	8
15～19歳	622	701	-79
20～24歳	353	411	-58
25～29歳	434	453	-19
30～34歳	547	550	-3
35～39歳	612	617	-5
40～44歳	732	735	-3
45～49歳	830	830	0
50～54歳	686	699	-13
55～59歳	818	850	-32
60～64歳	1,060	1,081	-21
65歳以上	4,956	4,960	-4
不詳	98	98	0
総数	13,182	13,411	-229

(出所：RESASのデータを抜粋して作成)

続いて、2020年における女性の昼夜人口の状況を次表に示す。

表5. 2020年における女性の年齢階級別人口 (単位：人)

年齢階級	昼間人口	夜間人口	昼間・夜間の差
15歳未満	1,251	1,250	1
15～19歳	621	688	-67
20～24歳	548	572	-24
25～29歳	351	376	-25
30～34歳	474	485	-11
35～39歳	550	570	-20
40～44歳	613	634	-21
45～49歳	719	748	-29
50～54歳	690	694	-4
55～59歳	838	862	-24
60～64歳	1,052	1,088	-36
65歳以上	6,611	6,646	-35
不詳	55	55	0
総数	14,373	14,668	-295

(出所：RESASのデータを抜粋して作成)

上に掲げた2つの表を比較してみると、男女ともにほぼ全年齢階級で昼間人口が少なくなっていることがわかる。(太字で示した。)新見市から別の市町村に通勤・通学しているということである。

更に詳しく見ると、「15～19歳」及び「20～24歳」の二つの年齢階級に関しては、男女ともに大きく流出していることが注目される。また、「15～19歳」の年齢階級と「55～59歳」の階級を中心として、昼間人口減少には二つのピークがあることがわかる。一方、女性に関しては、全年齢階級にわたり20人台から30人台のレベルで昼間人口が少ないことが特徴といえる。

続いて、新見市からの流出先としての自治体はどのような状況であるのか確認していきたい。

下の「表6. 2010年通学者流出先上位市町村の状況」は新見市から通学で市外に流出している状況を示している。

表6. 2010年通学者流出先上位市町村の状況 (単位：人)

流出元	流出超過先	流入者数	流出者数	差引流出者数
新見市	岡山市	10	55	55
	倉敷市	4	32	32
	総社市	1	10	10
	高梁市	31	142	142
	真庭市	13	42	42

(出所：RESASのデータを抜粋して作成)

本表と年齢階級別の流出状況を比較すると、「15～19歳」及び「20～24歳」の二つの年齢階級に関しては主に通学により市外に移動していると考えられよう。これら流出先である自治体は、大学あるいは専門学校を擁する自治体である。なお、差引流出人口の多い上位自治体として示した岡山市等5自治体は、流出超過上位の自治体と一致する。

続いて通勤による流出状況を確認してみたい。

以下に示す表は、新見市からの流出先の自治体と流出者数を示したものである。

表7. 2010年通勤者流出先上位市町村の状況 (単位：人)

流出元	流出超過先	流入者数	流出者数	差引流出者数
新見市	岡山市	157	184	27
	高梁市	222	521	299
	真庭市	171	204	33
	吉備中央町	11	37	26
	庄原市	90	367	277

(出所：RESASのデータを抜粋して作成)

通勤に係る流出に関しては、高梁市及び庄原市の両市が多くを占める結果となった。これら上位2自治体が約300人の流出超過であるのに対し、本2自治体以外の上位自治体である岡山市、真庭市及び吉備中央町は、二桁の差引流出者数にとどまっている。このような通勤の状況についてまとめると、新見市に隣接自治体に多く就労していることがわかる。

以上から、通学と通勤の状況を考察してみたい。

まず、通学に関し、新見市には進学先としての受け皿は新見公立大学のみである。地元高校生が医療系以外の学びの場を考えると、他の自治体の大学・専門学校等に行かざるを得ないという状況となる。^[3] 従って、新見市における医療系以外の進学先を希望する高校生は流出する結果となる。

また、通勤に関しては、新見市に隣接する自治体企業に多くが就労していることを勘案すると、新見市内に受け皿となる企業が少なく、あるいは新見市内にある企業よりも良い労働条件の企業を求めて他の自治体に流出することが考えられる。

このような背景から、新見市から多くの年人口が流出しているという結果となったものと考えられる。

7. まとめ

これまで新見市における人口減少について、少子化と人口流出の面から分析を試みてきた。本市における人口減少の原因は単に出生率の低下ということではない。若年層の人口が流出し、戻ってこないこと、特に若年層の女性人口が流出した後に回復しないことが大きな原因と考えられる。このような状態が継続することにより出生率の低下をもたらし、人口減少が継続するという、負の連鎖をもたらしているということがわかった。

若年層の人口流出に関し、高校及び大学を卒業する年齢階級に多く流出があり、その後流出した人口が戻らない状態となっている。また、通勤の状況を勘案すると、新見市には労働力の受け皿となる企業が少なく、労働力人口の流出に歯止めが利かなくなっている可能性がある。

本研究では、労働条件と労働人口移動の関連を調査については対象としなかったが、今後、このような側面から人口減少を考えていきたい。

人口の減少と高齢化は、行政サービスも含め、病院、教育機関等社会インフラの存続に影響するものである。このことは、住民の居住環境の悪化を意味する。

今回の調査研究では新見市を取り上げてみたが、少子高齢化は現在、日本の多くの自治体で問題となっていることである。少子高齢化の問題は自治体毎にその内容を分析し、個々に対応することが求められることとなる。

(注 記)

- [1]旧新見市、大佐町、神郷町、哲多町及び哲西町が合併し、新新見市となった。
- [2]「新見市まち・ひと・しごと総生総合戦略 検証結果 平成29年度実績」によると、30歳から39歳の男性の未婚率は51.9%で、25～34歳の女性の未婚率は33.7%であった。
- [3]新見市には県立新見高校と共生高校の2校がある。両校のホームページによると、新見市内にとどまらず、幅広く他の自治体の大学・専門学校に進学し、企業に就職している状況にある。

(参考文献)

- [1]新見市ホームページ https://www.city.niimi.okayama.jp/gyosei/gyosei_detail/index/97.html (2024.2.29 閲覧)
- [2]厚生労働省：「令和4年度版労働経済白書」(2022)
- [3]RESAS 地域経済分析システム <https://resas.go.jp/#/33/33210> 2024.2.29 閲覧
- [4]e-Stat (統計で見る日本) <https://www.e-stat.go.jp/regional-statistics/ssdsview/municipality> 2024.2.29 閲覧

[5]新見市まち・ひと・しごと総生総合戦略 検証結果 平成 29 年度実績

https://www.city.niimi.okayama.jp/media_images/files/H29kensyoukekka.pdf (2024.2.29 閲覧)

[6] 寛 裕介：「人口減少×デザイン」，英治出版（2015）